



ヨハネ福音書三章一六節講解（ジョン・Q・ライル）

16節「神は実に……世を愛された」——主はこの節において、もう一つの「天上のこと」をニコデモに示された。ニ

コデモは恐らく多くのユダヤ人と同様に、神のあわれみの目的は完全に選民であるイスラエルに限定されており、メシヤが現れる時には、ユダヤの国の特別な利益のためにだけ現れると考えていたであろう。主はここで彼に対し、神は全世界を例外なしに愛しておられ、神のひとり子であるメシヤはアダムの全家族に対する父なる神からの賜物であり、ユダヤ人であれ異邦人であれ、救いを求めて主を信じる者は永遠のいのちを持つと語られた。

頑固なパリサイ人の耳には、理解することができないほどの、驚くべきことばではないか！ 聖書にはこれ以上すばらしい節を見出すことはできない！ 神が、このような邪悪な世を嫌うどころか愛してくださるとは。神が救いを備えるほど世を愛してくださるとは。救いを備えるために神は、天使や、他の被造物ではなく、御自身のひとり子である御子という尊い贈物を与えてくださったとは。このすばらしい救いが、信じる者には誰でも無代価で与えられるとは。これらすべてのことは、本当にすばらしいことではないか。これこそ本当に「天上のこと」であ

る。

「神は……世を愛してくださった」ということばは、二つの全く異なった解釈がなされている。この問題は重要なので、それぞれの見解を十分に述べてみたい。

ハッチソン、ラムベ、ギルのような人々の考えはこうである。ここでの「世」とは、神が、ユダヤ人であれ、異邦人であれ、すべての国の中から選び出された者を指しており、「愛」とは、選ばれた者が、世が造られる先から愛されていた永遠の愛を指しているものであり、その愛によって、彼らの召し、義認、保持、そして究極的救いが、完全に保証されるのであると。

この見解は、多くの、そして偉大な神学者たちによって支持されているが、私には主が意味しておられたことであるとは考えられない。なぜなら、一つには、「世」ということばを選ばれた者だけに限定してしまうのは、ことばをひどくゆがめてしまうことになると思えるからである。「世」ということばは、明らかに「邪悪な」ものに対してもっぱら用いられることばである。私は、このことばが、聖徒たちを指すものとして用いられていることばであるということには、納得できない。

もう一つには、「世」ということばが、選ばれた者のみを指しているという解釈は、私の目から見れば、この聖句に示されている、人類全体と人類の中の「信じている」者との間に明らかになされている区別を無視することになるからである。もし「世」が、人類の中の信じている人々だけを指すのであれば、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは世が滅びることのないためである」と言えば、それで十分であったであろう。しかし、主はそうは語られなかった。主は、「信じる者、すなわち、世の中の信じる者は誰でも」と言われたのである。

最後に、神の愛を選ばれた者だけに限定してしまうことは、神の性質を厳しく、狭いものにしてしまい、キリスト教は信じない者に対して厳しく不公平であるという現代の批判を、まさに受けるようにさせてしまう。もし神が選ばれた者以外の誰にもみこころをかけられず、配慮されないとするなら、神はどのようにして世をさばかれるのであろうか。

私は、選びをなさる父なる神の愛を、他の誰にも劣らぬほど強く信じている。神は特別な愛をもって御自身が愛する羊を永遠の先からキリストに与えられたが、そのことは、信者にとって最も祝福された、しかも慰めに満ちた真理であり、最もうれしく、最も有益な真理である。ただ私が言いたいのは、この聖句がここで述べている真理は、そういうものではないということである。

「神は世を愛された」ということばの真の意味は、次のようなものであると私は思う。「世」とは、聖徒とあらゆる罪人を含めた全人類を意味している。私の意見によれば、このことばはヨハネ一10、29、六33、51、八12、ローマ三19、IIコリント五19、Iヨハネ二2、四14においては、このような意味で用いられている。ここで用いられている「愛」とは、神の全被造物、特に人間に対するあわれみと同情の愛である。それは、詩篇一四五9、エゼキエル三三11、ヨハネ六32、テトス三4、Iヨハネ四10、IIペテロ三9、Iテモテ二4に現れるのと同じ感じの「愛」である。これは、神が聖徒に対して示される愛とは、明らかにはっきりと区別された愛である。これはあわれみの愛であって、是認する愛や、人を喜ばそうとする愛ではない。しかし、それは真の愛にまさるとも劣らない愛である。神が世をさばくに当って不公平であるという非難を取り除く愛である。

私が今述べた説に対して一般的に提出される反論について、私はよく知っているが、それらの反論は重要ではないので、それらに答える必要はないと思う。神の愛を、選ばれた者だけに限定してしまう人々は、神の性質と属性

に對して、狭く縮小された見解を持つているのだと私には思える。彼らは、地上の父が放蕩息子に對して心配し、たとえ父親のあわれみが無視され、ゆるすという申し出が拒絶されても、なおゆるしを与えようとするようなあわれみの属性を、神に認めることを拒否する。私は長い間かかって次のような結論に達した。それは、人間は自分の言明においては聖書よりも組織的であり得るし、組織的であるということをお偶像のようにあがめることによって、重大な誤りに陥り得るといふことである。

私は便宜上、ダヴナント司教を完全なカルヴァン主義者と呼ばなければならないが、彼のことばを引用した次の文章は、私が擁護している見解が決して新しいものではないことを示すであろう。

「人類に對する神の普遍的な愛は聖書の中に明らかに証しされており、またこの世の個々の人々に對する神のいつくしみとあわれみはいろいろな効果によって示されているので、それを疑うことは不信仰であり、それを否定することは明らかに神に對する冒瀆である」(『ホアードに對するダヴナントの答へ』一頁)。

「神は御自身が創造されたものを嫌うことはなさらない。しかし、神が、いかなる被造物であってもその中にあつて罪を嫌われ、また罪によつて影響を受けた被造物をも嫌われるのは明らか事実である。それがあたかも神の属性であるかのように嫌われる。しかし、これらすべてのことのゆえに、神はアダムにあつて墮落した人類を等しく愛されて、御自身のひとり子である御子を与えた。そして彼を信じる者はどんな罪人であっても、滅びることがなく、永遠のいのちを持つようになされたのである。この永遠のいのちは、神によつて人間のためにこのように備えられたので、いかなる神の聖定も、信仰と悔改めをしない者を永遠のいのちにあずからせることはできないし、いかなる神の聖定も、悔い改めて信じた者を永遠のいのちにあずからせざるにしておくことはできない。神の愛の広さは、目に見える形での効果をもたらずものとして人間に示されたのであるから、神は御自身の恵みのある人よりは他の人

に豊かに注いだり、ある人の心には他の人の心に對してよりも、もっと力強く、効果的に働きかけられるし、それらを御自身の意志とみこころによつて行われるといふことを否定すべきではない。しかし、このより特定の愛が与えられない時には、神のより特定でない愛は、外面的で一時的な恵みに限定されることなく、むしろ内面的な靈的祝福にまで到達し、もし人の意図的な邪悪さがそれを妨げない限り、意志によつて永遠の祝福がもたらされるようになるのである」(同書四六九頁)。

「健全な判断力を持つてゐる改革主義のいかなる神学者も、もし信じるならばという条件のもとに、すべての人がキリストの死によつて救われるといふ、一般的意図や定めを否定しないであろう。なぜなら、神のこの意図や定めは一般的なものであり、聖書の中に明らかに示されているからである。たとえば、信仰と永遠のいのちの賜物を与える人に与えようといふ、神の絶対的で變ることのない意図が特別なものであり、選ばれた者にだけ与えられているとしても。——私はそう主張して來たし、今もそう主張する」(『フランス・カトリック教会の論争に對するダヴナントの意見』)。

カルヴァンはこの聖句に關して、「キリストはいのちをもたらした。なぜなら、天の父は人類を愛しておられ、彼らが滅びないようにと望んでおられるからである」と述べている。彼はさらに、「キリストは誰でも、という普遍的なことばを用いて、差別することなく、すべての人がいのちにあずかるように招いておられると同時に、信じない者にあらゆる口実を言わせないようにしておられる。世といふことばも重要である。世には神の愛顧を受けるのにふさわしいものは何もないが、主はこの世全体と和解する方として御自身を示され、すべての人を例外なしにキリストを信じるように招いておられるのである」とも述べている。

この聖句における神の「愛」と、「世」については、ブレンティウス、ブツァー、カロヴィウス、グラシウス、

ケムニトウス、マスキュラス、ブーリンガー、ベンゲル、ニファニウス、ダイク、スコット、ヘンリー、マントンも同じ見解をとっている。

この節における「それほどに」(英訳)という小さなことばは、深い意味を持っているので、多くのことが言われている。それは明らかに、「それほど大きな、それほど多くの、それほど愛情をこめて」という意味を持っている。フォードが引用しているサンダーソン司教のことばはこうである。「この『それほど』ということばは、人間の舌や知恵が表すことができないほど深い意味を持っている。そのことばが働く以上には、いかなるものも、それがいのちに対して持っている意味を表すことはできない。」

「そのひとり子をお与えになったほどに」——ここで注目しなければならないのは、キリストが賜物として与えられたのは、この世に対する神の愛の結果としてであって、その原因ではないということである。キリストが私たちのために死んでくださったので、神は私たちを愛してくださっているというのは、本来にあわれな神学である。しかし、神は愛していただくるので、キリストは世に來られたというのは、聖書の真理である。

「お与えになった」という表現は、注目すべき表現である。キリストはすべての人に、救い主、贖い主、罪人の友として、すなわちすべての人に十分な贖いをなしとげるために与えられ、すべての人があずかるのに十分な贖いを備えてくださったのである。このことを果すために、父なる神はキリストを惜しまずにお与えになり、キリストは私たちのために辱められ、拒絶され、嘲笑され、十字架につけられ、罪ある者とされ、呪いを受けられたのである。キリストは「私たちの罪のために死に渡され」(ローマ四25)、また神は「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された」(同八32)と書いてある。サマリヤの女に対しては、キリストは「神の賜物」(ヨハネ四10)であると言われており、パウロはキリストを「ことばに表わせないほどの賜物」(IIコリント九15)

と語っている。キリスト御自身は邪悪なユダヤ人に対し、「わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります」(ヨハネ六32)と語っておられる。注目すべきことは、この最後の聖句はアースキンがあまりにも手軽にキリストを罪人に与え過ぎると非難された時、スコットランドにおける大会を黙らせたものである。

主はこの節において御自身を、「神のひとり子」(英訳)と呼んでおられることに注目しなければならない。しかし、この節の前の節においては、御自分を「人の子」と呼んでおられる。これら二つの名前は、ニコデモに対し、メシヤが二つの性質を持っていることを印象づけるために用いられた。キリストは人の子であるだけでなく、神の子でもある。しかし、驚くべきことは、同じことばがキリストに対する信仰を述べている場所において用いられているということである。もし私たちが救われたいと思うなら、人の子であると同時に神の子であるキリストを信じなければならぬ。

「信じる者が……いのち」——これらのことばは、前節のことばと全く同じである。翻訳者がなぜ同じギリシヤ語を、一か所では「永遠」と訳し、もう一か所では「とこしえ」と訳さなければならなかったのかは、明らかではない。マタイ二五46においても同じように訳されている(訳注Ⅱ英訳では違うように訳されているが、新改訳では同じに訳しているので、この問題はない)。

「誰でも信じる者は」(英訳)ということばが繰り返されているのは、非常に教訓にとんでいる。第一に、このことばは神の愛が力強く、広いものであるので、キリストを信じない者にわざわざそのことを立証するのは無益であることを示している。神は全世界を愛しておられるが、神の愛するひとり子を拒む者は誰も救われまいであろう。

第二に、このことばはすべてのキリスト者が注目しなければならない重要な点を示している。すべてのキリスト者は、自分がキリストを信じていることに気づかなければならない。神が私たちが愛してくださっているのか、キ

リストは私たちのために死んでくださったのか、絶えず自分に問い返すことは、単なる時間の浪費であり、このような問題で心を悩ますことは聖書に対して全く無知であることを示すものである。聖書は決してこれらの質問に注意を向けるようには教えていない。むしろ、信じるように命じている。聖書は教えている。常に救いは、「キリストは私のために死んでくださったのだろうか」という質問に目を向けることにあるのではなく、「私はキリストを信じているだろうか」という質問に目を向けることにあるのである。もし人が「永遠のいのち」を持っていないなら、それは決して、神がその人を愛していないからでも、キリストがその人に永遠のいのちを与えてくださらないからでもなく、その人がキリストを信じていないからである。

この節を終るに当って、エラスムス、オルスハウゼン、ヴェットシュタイン、ローゼンミュラー、その他の人々が主張している、この節から21節までは主が語ったことばではなく、使徒ヨハネの説明あるいは観察であるという考え方は、私の目から見ると、全く根拠に欠けており、注目に値するようないかなる議論によっても支持されていないことを述べておきたい。主は御自分のことを語るのに三人称（訳注〓ここでは「ひとり子」を指している）を用いられるはずはないというのは、正論ではない。主が御自身のことを三人称で語っておられることは、しばしば見られる。たとえばヨハネ5:19、28を見よ（訳注〓ここでも主は御自分のことを指して「子」と言っておられる）。この説を採用しても何も益はないばかりか、世界のほとんどすべての信者が信じている一般的な見解に反している。

フラシウスは、この節とその前にある二つの節は、義認のあらゆる原因を含んでいると述べている。(1)遠因および有効な原因——神の愛、(2)直接的、有効な原因——御子をお与えになったこと、(3)実質的原因——キリストが十字架に上げられたこと、(4)手段的原因——信仰、(5)究極的原因——永遠のいのち。